

熊本労災病院のHPをご訪問いただきありがとうございます。

平成29年4月より、新たに院長に就任いたしました。これまで熊本大学で小児外科や肝臓移植を担当して参りましたが、心機一転、新たな職場に真っ白な気持ちで臨みたいと思っております。

昨年の地震で被害を受けられた方々におかれましては、1年経過する昨今、なお復興の道半ばでご苦労ご心労が癒えない状況が続いておられること、心よりお見舞い申し上げます。「創造的復興」の旗の下、私ども、災害医療を使命の一つとする労災病院としても、さらにできることを地道に行っていきたいと思っております。

労災病院は、元来、勤労者の命と生活の安全を守るために全国の勤労者地域を中心に創設されてきた歴史を持ちます。少子高齢化を背景に、医療に求められるものも自ずと変わりつつありますが、熊本労災病院は、熊本県南地域の基幹病院のひとつとして、幅広い年齢層や病気の範囲をカバーして、急性期の医療に対応する機能を維持し高めてまいりました。今や、国民の二人に一人はがんに罹患する時代となり、特に勤労者世代では、治療と社会復帰のスムーズな橋渡しも求められています。労災病院としての得意分野であった勤労者医療の延長として、リハビリなどの医療そのものも含め、がん患者様の治療と生活両立のサポートもこれからの大きな課題として意識していきたいと思っております。また、近隣病院や診療所との機能分担及び相互協力を今まで以上に高め、小児から高齢者まで、地域に根ざした身近な病院として頼っていただけるように努力を続けたいと思っております。

皆さんは、医療系のドラマは見られるでしょうか。一般に高視聴率を稼ぐ番組が多いそうで、最近のものには、私の専門領域である「小児外科」が登場するものもあり、知人が医療監修を務めていることもあって、毎回ビデオをとって見ていました。この手の番組で人気があるのは、結局「水戸黄門」に通じる、庶民（=患者様）ファーストか、お上（=医療者やその取り巻き）ファーストか、を題材にして、前者を結論にもってくることで視聴者の思いを代弁させる、というところにあるように思います。もちろん架空のドラマであり、時に「それはご無体な！」と思うところもありますが、医療者としての原点を今一度呼び覚ますものにも感じますし、日頃の自分の思いにフィットして心地よいものを感じるのは私だけではないと思っております。地域医療の第一線に立つ今、患者様ファーストの思いを今一度新たにして、これからも、熊本労災病院を、信頼に足る、身近な病院として感じていただけるように職員一丸となって努力いたしますので、なにとぞよろしくお願いいたします。